

## 日韓平和セミナー



ツアー帰国後の2017年1月14日(土)、東京都杉並区のセッション杉並にて「日韓平和セミナー」を開催しました。同セミナーは、主に杉並区在住・在学の中学生を対象として、ツアー参加者による報告を聞きながら、日本と韓国の歴史問題について理解を深め、将来の日韓友好に何が必要かを考えてもらうことを目的としています。当日は中学生20名のほか、高校・大学生7名、大人3名の計30名が参加しました。

### 1. セミナーの内容

約40分間の中で、韓国スタディツアーの報告と、感想表を用いた簡単なブレインストーミングを行いました。

ツアーの報告は、右表に示したように、まず目的と概要について述べ、問題の背景となっている日韓の歴史問題について説明しました。次に、西大門刑務所歴史館の報告では、20世紀前半に日本が韓国を植民地化した経緯と、刑務所に収容された韓

報告内容	報告者
韓国スタディツアーの目的と概要 日韓の歴史問題について	岩野
西大門刑務所歴史館	西野月
ナムムの家	岩野
韓国人青年とのディスカッション	八尾
まとめ、質疑応答	岩野

国人政治犯の生活の様子を説明しました。報告者からは、日本人は戦争や歴史に対してそれほど関心がない一方で、韓国人は若い時から歴史問題に関する教育を受けており、それが反日姿勢につながっているのではないかと見解が示されました。ナムムの家での報告では、慰安婦問題の背景と元慰安婦の方々の立場、そして彼女たちに直接面会して感じたこと・考えたことを報告しました。報告者からは、被害を受けた元慰安婦の方々の苦痛と悲しみを理解するとともに、和解にむけて当事者である彼女たちの意見を十分くみ取ることが重要であるとの指摘がなされました。韓国人青年とのディスカッションでは、議論した内容をテーマご

とに1つずつ紹介し、とくに歴史問題については、韓国人の若者の多くが日本政府に反省と謝罪を求めている現状を説明しました。報告者からは、和解への道が依然として険しい一方で、若者同士で歴史問題を率直に話し合うことは非常に意義があり、また歴史問題を抱えながらも友人同士として交流を深めることは十分可能であると述べられました。最後にまとめとして、日韓の歴史問題を理解するためには、日本が加害者であったことを知り、日韓双方の立場に立って同問題を考えることが必要であると伝えました。そして過去にとらわれすぎず、未来志向の関係を築くことが重要であると伝え、セミナーの結びとしました。フロアからは、西大門刑務所での被害状況（死亡者数など）に関する質問があり、日本による加害行為の実態に関心が寄せられたようでした。



▲西大門刑務所歴史館の報告



▲ナムムの家の報告



▲ディスカッションの報告

## 2. 参加者の意見・感想

フロアの参加者には、感想表への記入を通じて、次の3点について考えてもらいました。

- ① ツアー報告の中で最も印象に残った報告は何か。またその理由は何か。
- ② 韓国について新しく知ったこと、疑問に思ったことは何か。
- ③ 将来の日韓友好を築くために必要なことは何か。

以下、参加者から寄せられた意見・感想（抜粋）を紹介します。

- (1) ツアー報告の中で最も印象に残った報告は何か。またその理由は何か。

- ・西大門刑務所歴史館が印象に残った。当時、日本人がどれだけひどいことをしてきたか、理解することができた。
- ・西大門刑務所歴史館が印象に残った。日本が韓国人に対して残酷なことをしていたのに、韓国人はそれを学んでいる一方で、日本人はその事実を知らないことは問題だと思った。
- ・ナムムの家が印象に残った。慰安婦の人がお金ではなく、お詫びが欲しいと言っていたのが心に残った。日本が韓国にしたことは事実であり、韓国人の中には怒っている人もいると思うが、日本政府が一度心から謝って解決にはどうか。
- ・韓国人青年とのディスカッションが印象に残った。韓国人の方々が日本人に対しては怒りを覚えていないと聞き、少し安心した。
- ・韓国人青年とのディスカッションが印象に残った。韓国国民が（日本政府だけではなく）韓国政府に対しても怒っているという点がとくに印象的だった。

(2) 韓国について新しく知ったこと、疑問に思ったことは何か。

- ・韓国の人が理不尽な理由で処刑されたことをすごく残念に感じた。
- ・日韓の歴史において日本が「加害者」であったことを知った。(元慰安婦が)日本政府には恨みがあるが、日本人には恨みがないと言っていて、少し安心した。
- ・慰安婦の心の傷が深いこと、韓国では反日教育が幼い頃からされていることを初めて知った。
- ・従軍慰安婦の方が亡くなってきていて、時間の問題であるということを知った。
- ・韓国の人々が日本の悪い面だけを重視してしまっていることに驚いた。また、日本もそんな韓国の悪い面を重視してしまっているのではと思った。
- ・なぜもっと、日本人・韓国人がお互いのことを良く思っているという報道がされないのか。
- ・なぜ政府同士でそんなに意地を張ってしまうのかなと思った。国民同士の交流の妨げになってしまっていると思う。

(3) 将来の日韓友好を築くために必要なことは何か。

- ・日本人がもっと韓国について知り、真実を知っていくことが必要だと思う。
- ・(日本の)教科書を改めて、戦争の残酷さを伝えるべき。
- ・メディアに左右されない心。
- ・正しい教育。反日・反韓などの言葉の規制。
- ・日本や韓国が互いに相手を理解しようとする力を身につけるべきだと思う。
- ・自分たちの国のいいところなどを主張していけばいいと思った。
- ・お互いのことを良く思っている人もいるということをもっとアピールすべき。
- ・日本も韓国も今後どのように関わっていくかについて、お互いに自分の国のことも大切だが、相手の国の気持ちを考えて話をしてほしいと思う。
- ・政府同士ではなく、国民同士がもっと相手の国の人と会って仲良くなると良い。

### 3. セミナーを終えて

将来を見据え、中学生という若い世代を主な対象としましたが、難しいテーマであったにもかかわらず、それぞれの参加者が歴史問題について関心を持ち、学んだことを自身の言葉でしっかり表現していました。受け止め方は人それぞれですが、少なくとも①「加害者」としての日本、②韓国人の立場から見た歴史問題、③未来志向の考え方という本報告の主要なメッセージは、各参加者の心に届けることができましたと思います。このセミナーをきっかけとして、中学生たちがさらに歴史問題について知ろうとし、自身の意見を洗練させ、そして日韓友好の重要性を周囲の人々に伝えていけるようになることを期待しています。(岩野 智)

「私たちは繋がり合える！」

初めての韓国訪問でした。私は今まで「韓国」という国を深く考えたこともなく、知っていることはK-POPや有名な俳優の顔、プルコギ程度のお粗末なもの。ニュースから流れてくるチェ・スンシル氏の騒動や、セウォル号沈没事件、慰安婦問題、そして何より幼い頃からの反日教育等、比較的あまりよいイメージではありませんでした。韓国の人たちは日本人をどのような目で見るとだろうか？日本人だからといって嫌がられないか？そんな不安を抱いたまま韓国行きの飛行機に乗り込みました。

盛りだくさんの内容のツアーの中で最も楽しみにしていたのは、韓国学生とのディスカッションです。同世代の人達が、日本のこと日本人のことをどう捉えているのか、とても興味がありました。まず驚いたのは、彼らは自国の政治についてきちんと意見を持ち、歴史上何があったのかよく学んでいたことです。私達日本人とは違うなど、少し恥ずかしくなりました。そして、思い切って日本についての印象を聞くと、想定外の答えが返ってきたのです。

「日本人が過去にやってしまったことは変えられない。でも、今のように日本を憎むだけでは、互いが傷つき、憎しみからは何も生まれない」と。その瞬間、目の前がパーッと明るくなりました。更に、日本のアニメが大好きという人、ドラマを毎日ネットで観ているという人もいて、流行りの「恋ダンス」を完璧に踊れるのです。思わず嬉しくなっていました。

実際、私はこのツアーに参加するまで、慰安婦や刑務所のことなどよく知りませんでしたし、ましてや一緒にディスカッションしてくれた韓国学生の意見など知る由もありませんでした。ある調査結果があります。日本人と韓国人の老若男女に、相手国の印象を聞いたデータです。この結果に驚きました。なんと両者とも、「悪い」が軽く半数以上を占めているのです。悪い印象を抱いている人々は、おそらく互いの国のことを知ろうとしない人の意見ではないでしょうか。ディスカッションを経て、そう思いました。私は今までどれだけ自分自身の偏った情報に左右されてきたか、恐ろしくもなりました。

知人の中国人が言っていました。中国国内に居て海外に出たことのない人は、ほとんどが日本のことを良く思っていないけれど、近年の旅行で日本を知り、日本を好きになる人がどんどん増えていると。

相手を知ろうとしなければ、本当の相手の姿は見えてこないのかもしれませんが。逆に相手を知れば、案外簡単に仲良くなれるチャンスがあるのだとも実感しました。もちろん、今回知り合えた学生達のような意見をみんなが持っているわけではないでしょう。むしろ少数派かとも思います。しかし、この「知ろう」と歩み寄る気持ちを、もし世界中の人が持つことができれば…、連日報道される世界のギスギスした関係はもっと緩和されるでしょう。夢物語と言われるかもしれませんが、過去と未来を切り離して別次元で捉えていた韓国の学生達と知り合えて、それは現実にできると確信しました。世界中の同世代の人達と話をしてみたい！そう思わせてくれたスタディツアーでした。

去年に引き続き、私にとって2度目の韓国スタディツアーとなった今回、日韓合意から1年、また韓国国内でもさまざまな問題が起こっているなか行われました。去年と今年で社会の情勢が異なると、同じ“韓国”でもこれほど違うように見えるのだ、ということにまず驚かされました。

私が今回のスタディツアーで特に印象に残ったことは、ナムムの家での経験です。元慰安婦の方に実際にお会いすることができ、私にとって複雑な心情になった時間でした。「今の日本人が嫌いなのではない、当時の日本兵や政府を恨んでいるのだ」という言葉に少し安心したと同時に、彼女たちが私たち日本人に求めていることは何なのかわからなくなりました。謝罪かそれとも賠償金か。また、元慰安婦の方々と直接お会いして、従軍慰安婦などの歴史解釈の問題は、両政府のみで解決する問題ではなく、両国民がお互いの国に対する偏見や憎しみの気持ちを取り払わなければ、これから先、何も変わらないのではないかと思います。

お互いの考えを少しでも理解する良いきっかけとなったのは、3日目に韓国ユネスコ協会連盟にて行われた韓国の学生との交流です。皆自分の意見を持ち、私たち日本人はどう考えているのか積極的に質問する姿勢を見て、自分の意見を持つことの重要性を改めて感じました。帰国してからも、新しく建てられた釜山の慰安婦像問題、また日韓合意が破棄されてしまうのではないかと、など様々な問題が噴出しています。そのような日本と韓国が良好な関係を築くことができるのだろうかと不安になることもありましたが、その気持ちをディスカッションに参加した高校生と共有し、お互いに意見をぶつけ合うことができました。

私が納得させられた考え方を1つ紹介したいと思います。「韓国国民は日本に対して2つの見方がある。1つは日本に親近感を持ち、日本の文化や芸能に興味を持つ。もう1つは、韓国に対して攻撃や侵略を繰り返して、消えない傷を作った国家というイメージ」という言葉です。私の周りにも韓国のアイドルが好きな人はたくさんいて、韓国の学生の間でも日本の文化やテレビを好きな人はたくさんいます。それにも関わらず歴史や政治のことになるとお互いに対して厳しい意見を持つ。お互いの国の国民性や価値観の違いと言ってしまうと終わりのなかもしれませんが、これらの問題を解決することができるのか、またはずっとこの状態が続いていくことはしょうがないことなのか、目的地のわからないこの外交問題にどう向き合っていけば良いのか、スタディツアーを通してより一層わからなくなったような気がします。しかしこの状況に対して傍観者となるのではなく、これから様々なものを自分で見て、少しでも日韓の関係が良くなるように“自分で考えてみる”というところを大切にしていきたいと思いました。

◆実際に会って分かった韓国人

韓国人に対してそれまで持っていたイメージは、日本を嫌っていそうなことと、受験が大変そうなことであった。実際に訪れて韓国人と接してみて、韓国の印象が大きく変わった。

まず、韓国の人々の優しさに触れることができた。お店では、たくさんおまけをしてくれたり、道を聞けば丁寧に教えてくれた。戸惑っているところを見てわざわざ声をかけてくれて助けてくれた人もいた。日本人を嫌っていそうだという勝手なイメージを持っていたが、そうでないことが分かった。韓国の学生と交流し、日本人がK-POPアイドルや韓国ドラマが好きなのと同じように、韓国人も日本のドラマや漫画が好きなのが多いようだ。

◆韓国人から学ぶこと

韓国の人々は、政治への関心が非常に高く、行動的だと思った。ニュース番組を見ていても、ほとんどが政治に関する内容だった。現在、韓国の政治では大きな問題が起きているが、その質問に対して高校生たちはしっかりと自分の意見を述べていた。日本の高校生のうち、どれだけの人が自国の政府に対してしっかりとした意見を持てるのか、少し考えてしまった。また大規模なデモも日本では見ることはできないと思った。

さらに、日本とは比にならないような厳しい受験戦争を戦ってゆくだけあって、将来に対してしっかりとしたプランを持っていることが印象的だった。彼らは高校の三年間はずっと受験のために勉強しているようだ。その一日のスケジュールもハードで、朝から晩まで勉強詰めだ。モチベーションを保つためにも将来の夢や目標は大切なのだと思った。

◆平和学習を通して

報道される韓国人のイメージで勝手に韓国人に対して偏見を持ってしまっていることがあるが、実際に人同士での交流をたくさん行い、親交を深めることで、国家間の問題もいつかは解決できるようになるのではないかと思った。平和学習を通して、実際にあった事実は事実として受け止めて、それを踏まえて将来をより良いものにするために、先を見据えて互いに手を取り合っていくべきだと感じた。若者たちが互いをきちんと理解しあって、協力していくのが良いと思った。隣の国同士仲良くしていきたい。

## 参加者の感想

### 小林 穂菜美

今回のスタディツアーは仕事の関係で2日間だけ参加させていただきました。2010年から何度か参加させていただいて、節目となる10回目にも関わられたことをうれしく感じています。スタディツアーは毎回だいたい同じ場所に行きますが、メンバーが異なるところも感じ方や思うことに幅が広がるのかと、私にとって新鮮な気持ちをもてる貴重な場です。

まず、はじめて訪れたナムムの家。勉強不足で訪ねてしまったので、田舎の老人ホームというのが最初の印象でした。展示の数々に衝撃を受けつつも、どれくらいの人が見に来ているのか、交通の便が良くないこの施設へどんな方が訪ねるのか、また、高齢なハルモニ達が多い減ってしまう数年後、どのような意味をもつのかというような点がひっかかってしまいました。

そして、西大門刑務所。今回もそうでしたが、行くたびに変化がみられる場所です。前回はこども会のような団体ばかりでしたが、今回は家族連れの姿が多かったです。また、新たな施設の建設がはじまっていました。過去のことから学ぶことはありますが、そこにだけ重点を置くのはどうなのかと行くたびに考えさせられます。

ここ数年で、報道から感じる韓国に大きな変化があります。はじめて韓国を訪れたときは冬ソナやアイドルと韓流ブームが強いときで、すれ違う観光客も日本人ばかりでした。今は、日韓合意や大統領問題と決してよい印象をもつことはできない政治面が多いのではないのでしょうか。

しかし、人と人とのつながりには変化を感じられません。困っていたら声をかけてくれる町の人々、以前のスタディツアーをきっかけに親交をもつようになり、会う時間を作ってくれる友人たち。最近では、自分たちから見えるものだけでなく、異なる目線で韓国を知ることができ、より一層濃い時間を過ごせているのではと思います。興味のあることにいつも嫌がらず答えてくれる友人たちには感謝の気持ちでいっぱいです。

これまでたくさんのお話を学ばせてもらったスタディツアーですが、成長できていないところもあります。それは、私の韓国語の能力です。友人たちは日本語がペラペラなのに対し、簡単な会話すらできません。次回また行くことができる機会がありましたら、韓国語から韓国を知ることができるように、勉強してから行きたいです！

「私の名前は、”パク オクスン“」

第10回目の韓国スタディツアーは個人的には引っ越しと重なり、あわただしい中でソウルへ行くことになった。今回は元従軍慰安婦の方々が暮らすナムの家を初めて訪問した。事前に私たちの訪問が予約されていたためか、たまたまこの日が前年に日韓合意がなされたためか、テレビカメラが私達を待っていた。広い集会室で元慰安婦の方々と面会、そして所長アン シンクオンさんからの説明を受けた。日本人としては心地よいものではなかった。10年間韓国 ST をする中で、何回か見知らぬ韓国人から”謝罪”を要求されことはあった。今回、アン所長さんは説明の中で「もし天皇陛下がここへ来て、これらのハルモニ（元慰安婦の方々）の前で土下座して謝罪をしたら許そう」と私たちに言った。また8月に日本政府から支払われた10億円に関して、ハルモニ達も自分たちには何の相談もなく政府間で勝手に取り決められたことを非常に腹立たしく思うが、その一部はすでにハルモニ達に配られたとも話した。

その後、ビデオを見て歴史館を見学した。悲しみしか残らない経験だった。私の中にあった希望も無くなってしまった。元従軍慰安婦の方々は戦争中に受けた想像を絶する経験を、戦争が終わって70年以上経った今も、繰り返し、繰り返し、韓国のみならず海外にまで行って語っていらっしゃる。みなさんご高齢でかなりの方が痴呆症を患っていらっしゃった。面会したハルモニの中で日本語を話される方がいたので話しかけた。彼女は「私の名前はパク オクスン。日本でもアメリカでもパク オクスンは有名だから、日本へ帰ったらパク オクスンと言ってくれ」と、そのことだけを繰り返し、繰り返し、繰り返し、私に言った。気の毒だと思った。人生のほとんどを慰安婦として生きてきたのですね、パク オクスンハルモニ。

ナムの家を離れるとき、通訳をしてくださった若い韓国人女性に質問をした。「ハルモニの皆さんは韓国のみならず海外でも、従軍慰安婦についての講演をなさっていますが、ハルモニの皆さんはこの苦しい体験から、未来にむけて私達女性の尊厳を守り、少女、女性たちがレイプされない世界を作ろう、つまりこのような恐ろしいことを人間が平気でしてしまう戦争をなくそうというメッセージを同時に世界に送っていらっしゃるのですか？」と。彼女は答えてくれた。「これからそうするかも。」



このたった1枚の感想原稿を前にして、1ヶ月が経とうとしています。書けない…。いったい何をどのように表現したらよいのか、無責任に安易な言葉で表現してしまうには複雑すぎる問題の数々が日増しに重くのしかかっています。それほど、今回のスタディツアーは私にとって様々なことに目を向け、考える機会を与えてくれるものとなりました。

混沌とした韓国の情勢、日韓関係の悪化の中での訪問は、何が待ち受けているのか想像のつかない部分も多く、不安と期待が入り交じった感覚でしたが、やはり私を待ち受けていたのは、多くの問題を抱えている近くて遠い国でした。

単純に驚いたのは、戦争や侵略というものが身近な感覚として生活の中にあることです。自分が過去の出来事だと思っていることが、現在進行形で存在する国。地下鉄のホームや主要施設には、ガスマスクが設置され、各家庭にも常備されているといます。全国民がサイレンを合図に一齐に参加する軍事訓練が定期的に行われ、北朝鮮で大雨が降ると、川伝いに地雷が流れ着き時には負傷者も…非武装地帯へのツアーガイドさんの言葉が耳に残って離れません。「小さな国の私たちは、南北に分かれて戦っている場合ではない」と。そして驚愕する私に、仲良くなったソウル大の学生が話してくれました。「北朝鮮が攻撃してくるかもしれないという恐怖はなく、日本人にとっての地震と同じ感覚です」と。うーん、分かるような、分からないような…。

元従軍慰安婦の方にもお会いしましたが、問題の背後に別次元の力が働いているように感じ、謝らねえといたった単純な話ではないと感じました。(あくまでも私見です)

考えれば考えるほど眠れなくなることばかりですが、今回のツアーでひとつ明確になったことがあります。それは、若者のエネルギーで新しい潮流を生み出すことができるという確信です。ある高校3年生の女の子が、若者達的心情を話してくれました。「もう、祖父母の時代とは違います。財閥支配の慣例を断ち切らなければなりません。変えるのは今です。そして、変えられるのは私たち、若者なのです。」淡々と話す言葉が、なんと力強いものであったか。

報道で知る以上に、韓国の受験戦争の実態は過酷です。日本でいえば、最難関の国立を狙う学生の猛勉強生活を、韓国の学生達ほぼ全員が経験します。いったいどれだけのプレッシャーとストレスでしょうか。そのような受験生活の中でも、何か大きなものに突き動かされてデモに参加し、自分達の将来を切り開いていこうとする彼らの姿に目が覚める思いでした。

私は国を超えた若者の団結こそが世の中を変えていけると、周りの子供達を煽ってきました。しかし、それだけでは不十分なことに今回、気づかされました。実際に会ったり、話をしたりする機会や場所を作っていかなければ、SNSで繋がっているだけでは単なるお友達で終わってしまいます。

今、私たち大人が注力すべきことは、彼らに活動の機会をどれだけ用意できるか。その一点に尽きると思います。世界中で自国主義だとか、断絶、分断という言葉が舞い、私たちの不安を煽る中で、若いエネルギーの団結はそれを払拭してくれるでしょう。幸い、子供達は歴史に縛られず未来をみる力を持っています。地球の裏側にいてもインターネットに繋がっていれば大勢で顔を見ておしゃべりできる世の中です。さあ、未来は明るい！

「歴史問題の解決とユネスコの役割」

開始から 10 年目を迎えた韓国スタディツアー。企画者として、まずは 10 年間継続してツアーを開催できたことを素直に喜びたいと思います。その一方で、この 10 年間に日韓関係は必ずしも好転したわけではありませんでした。当初、本ツアーを立ち上げた時期には、小泉純一郎首相が毎年靖国神社を参拝し、韓国や中国から批判されていました。さらに、当時内閣官房長官であった安倍晋三氏に「ポスト小泉」を託そうとしていた時期でもあり、日本の右傾化、そしてアジア諸国との関係悪化を心配する声があがっていました。問題の中心にあったのは、やはり歴史問題です。それから 10 年が経ちますが、歴史問題は未だに解決されていません。本ツアーは初回から一貫して「韓国の歴史・文化を理解する」という目的を掲げてきましたが、10 年目の節目を迎え、いよいよ歴史問題に焦点を当てようと思い、ナヌムの家の訪問を含む行程を企画しました。

ツアーを企画するにあたり、ユネスコが歴史問題という政治的問題に関わってよいのかという葛藤もありました。すなわち、ユネスコは教育・科学・文化の諸分野で平和実現のために活動しており、これまで政治や外交とは一線を画してきました。今回のツアーはそのタブーを冒すことになりはしないかという不安があったのです。しかし、日韓の両国民が交流するにあたり、歴史問題が障害となっていることは誰の目にも明らかであり、同問題の解決にむけてユネスコとして何ができるかを積極的に考えるべきではないかと思い、今回歴史問題に正面から取り組むことにしました。

歴史問題の中でも、とくに慰安婦問題は、当事者の方々がご高齢ということもあり、優先的に解決すべき問題であると思われます。そこでナヌムの家を訪問したわけですが、元慰安婦の方々にお会いして、失望と安堵が入り混じる何とも複雑な心境になりました。ナヌムの家に入所されている方々は、一貫して日本政府を断罪するという立場を取っていらっしゃる。日韓の中途半端な政治的妥協では、到底和解はできないという強硬な立場です。その一方で、私たち若い日本人の訪問者に対しては、まるで孫をもてなすかのように、優しく手を取って「よく来たね」と言ってくださいました。おそらく元慰安婦の方々も、日本人とは仲良くしたいと思っていらっしゃるのではないのでしょうか。彼女たちの心情を察すると、関係者の誰も下手に動けない現在の硬直した慰安婦問題が、私には非常にはがゆく感じられるのです。

慰安婦問題についてさらに付け加えると、2017 年 1 月 24 日に NHK の「クローズアップ現代+」において、「韓国 加熱する“少女像”問題～初めて語った元慰安婦～」が放送されました。そこでは、2015 年 12 月の日韓合意に基づき日本側から拠出された補償金を受け取ろうとする元慰安婦の方が映し出されていました。特徴的だったのは、身元が特定されないよ

うにモザイクがかけられ、名前も伏せられていた点です。また、その方（実際にはそのご家族の方）は補償金を受け取ることで和解をしたいとおっしゃっていましたが、韓国の国内世論がそれを許さず、周囲に補償金の受け取りを公表できないとのことでした。ご本人の言葉が今でも記憶に残っています。「私の人生は苦労ばかりで悲しかった。思い出すと涙が出ます。慰安婦が苦労してきたことを世間の人たちは分かっていないのに、あのようなこと（少女像をめぐる騒動）をやっています。（日本からもらったお金を）返すべきだと言っていますが、私は返したくありません。本当に胸が痛みます。」—元慰安婦の方々の間でもさまざまな意見があり、上の方のように日本政府の対応にある程度理解を示す方もいらっしゃいます。しかしその声が社会に届かず、打ち消され、しまいには批判の対象とされかねない状況なのです。慰安婦問題は当事者の手を離れて独り歩きしているようにも思われます。

それでは、このような複雑な歴史問題に対して、ユネスコとしてどのようにアプローチすることができるのでしょうか。もちろん問題を直接解決することは困難であろうと思われます。むしろユネスコの理念を活かして、歴史問題に関する過激な言動を慎むよう、世の中に訴えていくことができるかと思えます。つまり、ユネスコ憲章前文において「無知と偏見」が戦争の原因であるとされているように、歴史問題も日韓両国民の「無知と偏見」が解決を難しくしているという側面があります。日本人の中には韓国人を異常な価値観を持った国民と見ている人がいますが、少なくとも私の経験上、韓国人は「善」あるいは「正義」に重きを置いて、道徳的に正しいことをしようと日々努めています。日本政府に対する公式の謝罪と賠償の要求は、まさにその一環であると思われるのです。一方、韓国人の中にも日本人のことを、過去の過ちを認めない不誠実な国民と見ている人がいます。しかしほとんどの日本人は、戦時中に日本が周辺国に与えた被害について反省しており、将来にむけて不戦の誓いを立てています。韓国では日本政府の対応がクローズアップされすぎて、日本人の気持ちがしっかり伝わっていないように見受けられます。このように両国民の間で「無知と偏見」があるため、歴史問題の落としどころがなかなか見つけられないのだと思います。

私たちは民間ユネスコとして、自由に韓国を訪問し、自由に韓国人と会い、彼らと自由に意見交換をすることができます。そこで得た情報を周囲の日本人にありのまま伝えることが、まずは「無知と偏見」を防ぐ第一歩だと思います。同時に、韓国で出会った韓国人にも日本人の本当の気持ちを伝えることが必要です。本ツアーのディスカッションと帰国後の日韓平和セミナーは、これらを実践する活動として位置づけられます。このような機会をさらに増やしていき、相互理解のきっかけをつくっていきたいと思っています。さらに、ヘイトスピーチに見られるような、相手を攻撃・侮辱するような言動に対して、明確に反対の立場を示していかなくてはなりません。少数の過激な意見が、ささいな出来事をきっかけとして、いつ社会全体に普及するか分かりません。国民全体が感情的となり冷静な議論ができなくなれば、歴史問題の解決はいつそう難しくなってしまうのです。戦争への反省から生まれたユネスコの理念は、戦争の再発を防ぐだけでなく、戦後の問題解決にも役立てられるのではないのでしょうか。今後もユネスコに何ができるかを考え続けていきたいと思っています。

## あとがき

本報告書を終えるにあたり、10 回目の韓国スタディツアーが無事に終了したこと、また 10 年もの間、本ツアーを継続することができたことに対して、感慨深いものを感じています。今回のツアーは日韓の歴史問題に焦点を当て、その解決策を模索することを目指しました。正直なところ、3泊4日の短い滞在期間で明確な答えを見出すのは、非常に困難なことであると思います。しかし「参加者の感想」でも述べられているように、各参加者が現地で直接韓国人と触れ合うことで、暗闇の中にもかすかな光を感じることができ、問題解決の扉が閉じられていないことを確認することができました。とくに日韓の青年同士による交流は、将来にむけて相互理解を深めるための効果的な方法の 1 つであると思われます。また日韓平和セミナーで、ある中学生から「自分たちの国のいいところなどを主張していけばいい」という意見を寄せてもらいました。シンプルですが、相互理解には欠かすことのできない重要な視点であると思います。相手の悪い部分を取り上げ批判し合うだけでは、何ら解決には結び付きません。互いの文化を尊重するという異文化理解の基本理念を思い起こし、相手から見習うべきところや共有できる価値観を見つけていくことこそ、停滞した歴史問題を前へ進めるために必要なことではないでしょうか。

最後に、今回のツアーではさまざまな方に変なお世話になりました。ツアー1日目にソウル大学を案内してくださった、同大学院生のホン・スジさん。ホンさんは3年前のディスカッションに韓国側で参加していただきました。それ以来、私たちとの交流を続けてくださっています。次に、ツアー2日目に夕食をご一緒したカン・ミンジさん。カンさんは4年前に当協会の「ユネスコ教室」(サマーキャンプ)に参加していただき、翌年の韓国でのディスカッションにも急遽駆けつけてくださいました。さらに、ツアー3日目のディスカッションに参加してくださったハン・ユジンさん。ハンさんは2年前のディスカッションに初めて参加され、今回のツアーでもディスカッションを盛り上げてくださいました。この3名の方々は日本にとっても好意的で、日韓友好を心から願っています。私たちにとって信頼できる大事な友人です。これからも彼女たちとの親交を深めていきたいと思っています。そして、今回のディスカッションで初めてお会いしたチャン・ジュンギュさん、チョン・ミンソさん、リュウ・ジウンさんの3名の高校生の方々には、有意義な意見交換の中で貴重な韓国人の見方・考え方を教えていただきました。この出会いをきっかけとして、ぜひ厚い友情を育んでいきたいと思っています。

他に本ツアーを支えてくださった方で、忘れてはならない方(団体)がいらっしゃいます。それは韓国ユネスコ協会連盟と日本ユネスコ協会連盟です。韓ユ協連の方々はお忙しい中、ディスカッションを含む交流プログラムを10年間毎年用意してくださいました。ご協力に心より感謝申し上げます。日ユ協連の方々には、複数年にわたり助成金による貴重なご支援をいただいております。ご厚意に深く感謝するとともに、今後とも連携してよりよい活動を目指していきたいと思っています。本当にありがとうございました。

岩野 智

第 10 回韓国スタディツアー報告書  
2016

発行日 2017 年 2 月 11 日

発 行 杉並ユネスコ協会

U R L <http://suginami-unesco.org/>



United Nations  
Educational, Scientific and  
Cultural Organization



杉並ユネスコ協会